

---

# 異世界の悪魔

あいあむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界の悪魔

### 【Nコード】

N1722V

### 【作者名】

あいあむ

### 【あらすじ】

神谷啓人は自分を異世界に召喚した施設を破壊し、召喚した国に敵対する国に拾われる。彼が意識を取り戻したとき、彼に異世界に  
来てからの記憶はなかった。 不定期更新です。

## プロローグ（前書き）

必要ないとは思いつつも書いてみたかったプロローグです。  
必要ないので興味なければ読み飛ばしても平気という仕様です。  
たぶん。

とりあえず最初から厨二な感じで行ってみました。

## プロローグ

ある男の話をしよう。愚かで、聡明な。そんな男の話だ。

端的に言えば、男は極めて優れていた。頭腦的にも、体力的にも。それ故に、愚かだった。自らの失敗をよしとせず、他者への依存をよしとせず。本来ならば、そんなことできるはずもないのだ。

しかし、不幸なことに男にはそれが可能だった。何故なら、男が異常なまでに優れていたからだ。結果、男は孤立する。

男が周りを顧みない　　いや、顧みる必要がないために、男の才能に憧れを抱いていた味方が消える。男はそれを気にしない。同じ理由で、男の才能をひがむ敵が増える。男はそれを気にしない。

そんな息子に親は恐怖し、別居を始める。男はそれを気にしない。

ある者は言った。彼はまるで英雄のようだ、と。

その者の言ったことは的を射ていた。確かに、男の才能は英雄と呼ぶに足るものだった。それこそ、生まれた時代を間違えたのかというほどに。

そう、男が哀れなのは時代が英雄を欲していなかったということ。必要とされない才能はただの異端であり、異常だ。

異常に対してできることは、その異常を正すことだ。それができなければ、それを見なかったことにするしかない。

だから、なのだろうか。

彼が居なくなっても、誰一人として気付かなかったのは。

## 01話 悪魔(前書き)

三人称って難しい。書ける人は本当に尊敬します。

## 01話 悪魔

「あ、ああ、あああああ！」

男は恐怖していた。ありえない、ありえない、ありえない。彼の目の前に広がるのは、さながら地獄絵図だ。神殿に立ち込めるのは、屍臭であり死臭だ。神殿、神官、司祭、神殿騎士。あんなに強かった副騎士長や、騎士長。それら全てが燃やされる。神殿の祭神に関するありとあらゆるものが、次々と燃やされていく。

この地獄絵図の中にあつてただ一つの傷もなく、黙々と同僚を燃やし続けるあの男こそが悪魔だと言うのか。ああ、確かにあの黒の瞳と黒の髪は悪魔と言うにはふさわしい。

悪魔に対しては、神殿騎士の近接攻撃だけでなく、彼ら神官の魔術までもが等しく無力であった。この悪魔の前では、ありとあらゆるものが燃え落ちる。それはやはり、神官たちの魔術をもその範疇に収めた。火・水・地・風・雷。基本とされる五属性の魔術全てが無力である。神殿騎士に限っては、悪魔に接近することすらできない。一定の範囲内に入った瞬間に須らく標的とされ、燃やされてしまうのだ。

神の前では森羅万象すべての事物が平等であると信仰する彼らにとつて、悪魔が生み出す理不尽なまでの平等さは何と皮肉なことだろう。

「燃えろ、燃えろ、燃えろ！」

悪魔が言霊を唱えるたびに、一人、また一人と同僚が燃え上がる。驚いたことにこの悪魔は、詠唱が一節しかない初級魔術だけでこの惨状を引き起こしていた。足から燃えているところを見ると、あれは相手の足元から火柱を上げているのだろう。そんなの、一節の詠

唱だけでできる範囲を超えている。

恐怖に足がすくみ、逃げることもできずにただただ立ち尽くす。たった一つできるのは、ひたすら無力に祈るだけだ。願わくは、自分の番が来ないことを。

ああ、神よ、我らが神セーラよ。何故このような残虐、このような非道をお許しになるのですか。何故、悪魔の存在をお許しになるのですか。

この場にいる神官、司祭、神殿騎士たちの総意と思える祈りに、しかし彼らの神は応えない。

その代わりとばかりに響くのは、同僚たちの断末魔と、悪魔の狂ったように笑う声。神官たちの無力を嘲笑<sup>わら</sup>っているのか、はたまた殺戮の快楽に酔っているのか。

その笑い声に、耳を犯されるような感覚。遂にと言うべきか、男は我慢が出来なくなつた。それが結果死に急ぐことになるを知つていながら、彼は恐怖を振り払うために攻撃せずにはいられなかつた。

「落雷せよ！」

雷属性の初級呪文。雷属性の特徴はその攻撃速度と、その照準の難易度だ。ややコントロールに不安が残るが、雷属性は照準すればいい相手が明確な対個人でこそ比類なき強さを発揮する。

「燃える！」

しかし悪魔は、そんなことお構いなしだった。雷属性の攻撃のための初級魔術を、火属性の同じく攻撃のための初級魔術で防ぐ。

雷を燃やす。そんな非現実的な現象が、今目の前で起こっている。同じ初級魔術でありながら存在する、圧倒的な威力の差。男は術者によって同じ階級の魔術でも大きな差が発生するとは聞いたことがあつたが自分の周りにそんなことはなかつたために、どこか自分に

は関係のないものだと思っていた。悪魔が初級魔術だけで神殿に地獄絵図を描いたときに、それを実感するべきだったのだ。

「燃える！」

男の意識に残ったのは、体に突如発生した多大な熱量だった。

その女は、執事を連れていた。女が着ているのは煌びやかな白のドレス。そのふわりとして柔らかそうな栗色の髪に、全体的に柔らかい雰囲気を与える顔立ち。それに反して、どこか芯の通った凛とした雰囲気。

対する執事はといえば、若く一見優男風の外見でありながらもいかにも執事といったようなフォーマルな黒のスーツである。中折り帽を乗せた腰まで伸ばした翡翠色の髪に隠れて、金の瞳が映える。品を損なわないような身のこなしでありながら、極限まで消された気配。周囲への威嚇の必要のないときの彼は、主の邪魔にならないようにと影のように佇む。

そんな二人がまだ完全に夜が明けきつてもいないこの路地裏にいるのは、ひたすらに場違いだ。しかし、そんなことなど関係ないとも言うように、彼女たちは歩く。女が一人だけで歩いていたというだけならば、きつと浮浪者たちに彼女は暴虐の限りを尽くされたことだろう。社会の底辺とも呼べる環境で満足に欲求も満たせない身の男たちに捕えられたうら若き女性の末路というのは、想像するに難くない。

しかし彼女たちの周りにいる浮浪者たちは彼女に襲いかかることもしなければ、獸欲を滾らせた目で彼女睨め回すような真似もしなかった。

それはひとえに、彼女の傍に執事がいるからだ。魔術も使えなければ武術の経験もない彼らは、その執事に対して本能的に危険を感じ取っていた。齒向かえば殺される。それがただ執事がそこに佇んでいるだけでわかる。

しかし、浮浪者の中に立ち上がる者が一人現れた。生命の危機を感じているからといって、女の容姿の美しさが変わるわけでもないよって、執事にその程度のこと予想できていないわけもなかった。その瞬間浮浪者たちは、ぼう、と執事の輪郭が浮かび上がるような錯覚に襲われた。

彼らが瞬いたとき、そこあった光景は変わらず佇む執事だけだった。立ち上がっている浮浪者など一人もいなかったが、そこに確かに立っていたはずの一人の浮浪者もいなくなっている。いや、それは既に人間と呼べるものではなかったというだけの話だ。頭蓋が砕かれ血の海に脳を撒き散らすだけのそれは、人間ではなくただの肉塊だ。執事の革靴の踵部分を中心に広がる赤だけが、先ほど何が起こったのかを示唆していた。

「いつもありがとうございます、クロウド」

女の声は、まるで何事もなかったかのようだった。浮浪者のうちが立ちあがったという事実も、人が一人死んだという事実も、何もかも。

「もったいなきお言葉です、姫様」

執事はそれに対して、恭しく頭を下げるだけだ。まるで日常会話でもするかのような二人に、浮浪者たちは戦慄する。彼らは震える

自分の身体を掻き抱きながら、二人が去るのをひたすらに待った。

彼女たちは再び歩き出す。ただ存在するだけで発する威圧感を撒き散らしながら、進む。進む。進む。

やがて十五分ほどたった頃だろうか。彼女たちは目的のものを見つけた。

「いましたね。クラウドはこれについてどう思いますか？」

凜とした声が路地裏に響く。

「失礼します。少々お待ち下さい」

執事はそのいたるところに手を触れ、その感触を確かめる。執事はそれを注視したまましばし思考し、やがて結論を出した。

「魔力切れ、でしょうか……。見た目通り、外傷はありません。神経がところどころ切れているようですが、回復の魔術でどうにかなる程度でしょう。魔力切れにしては軽傷と言ったところですよ」

魔力切れとはその名の通り魔力が切れることであり、神経の断裂などを引き起こすものだ。最悪の場合全ての神経が断裂し体が全く動かなくなることもあることを考えると、確かに治療できるといふことは軽傷だった。

しかしその的確な診断に、女は首を横に振る。

「いいえ、違います。それも大事なことでありますが、私が聞いているのはそれが使えるかどうか、です。使えなければ、持ち帰る必要もないでしょう？ その場合は、とんだ無駄足になってしまいますけれど」

女の判断は残酷であるが、彼女たちの目的を考えればそれは正しい判断だ。それを分かっているが故に、それに対して執事は何も言わない。彼らにとって甘さとは切り捨てるべきものでしかないのだ。

「使えるか使えないかで言えば、使えません」

執事は言い切った。女が落胆の色を見せたところで、しかし、と続ける。

「それは今はまだ、我々の求めるレベルだと、の話です。これは言うなれば原石。磨けば磨くだけ光るでしょう。それに、一般的に見れば今でも持っている力はかなり強いです。冒険者で例えるのなら、Aランクはとれるはずですよ」

その評価に、女は満足したようだった。しかし女の顔は、毅然として律されたままである。執事はそんな主を見て、微笑む。最初に使えないと言ったのは、ちょっとした悪戯だったようだ。本来執事であれば主に悪戯をするなど罰せられてもおかしくない所業だが、この二人は主従関係を持ちながら信頼関係も持っていた。この程度ならば、よくあることだった。

「はい、それでは無駄足にならずに済みましたね。それに、あちら側に先を越されなくてよかったです。あちらの戦力が増えないに越したことはありませんから。では、少しの間持っていてください」

その言葉に執事はそれを担ぎ、言霊を紡いだ。

「風よ、運びたまえ」

一陣の風が吹き、彼女たちは唐突に消えた。直前に覗き見た、執

事が担いでいたそれは黒の髪を持つ少年だった。

## 02話 危機

パチリと、神谷啓人は目を開いた。次に、自分の目を擦る。啓人には目の前に広がる光景に見覚えがなさすぎたからだ。

天井にかけられたシャンデリアがそもそもおかしかった。啓人が住んでいる部屋を照らすのはシャンデリアではなくてただの蛍光灯である。

異常を感じた啓人はベッドに横たわったまま部屋を見渡そうとして、気付いた。自分の部屋にはベッドはないということに。啓人が普段寝ているのは、一人暮らしを始めるときに家具を買わなくても済むようにと実家から持ち運んだ布団であった。

ここは既に自分の部屋ではないということに気付きながらも、部屋を見回す。そして、更に困惑することになった。自分の部屋ではないと分かっているにしても、その部屋は啓人に衝撃を与えるに十分だった。

まず、広がった。啓人の住んでいたお世辞にも広いとは言えない六畳間の部屋など比べるのもおこがましいと思ってしまうほどに。部屋にある窓もかなり大きい。

そして何よりも、豪華だった。豪華と言っても、部屋の主が富裕層の人間だということが透けて見える、自らの財力を誇示するような下品さはない。化粧台の鏡の枠などにさりげなくあしらわれた金色や、先ほどのシャンデリアなどからちらりとうかがえる程度である。しかし、それがまた部屋の主の気品をうかがわせた。

しかし、啓人に最も衝撃を与えたのはそのことではなかった。自分の黒の髪と黒の瞳が映る化粧台のその横にある本棚。そこに並んでいたのは、全て見覚えのない字に背表紙を飾られた本だ。それが示しているのはおそらく、ここは啓人の住んでいるはずの国である日本ではないということだ。確証はなかったが、その考えは不思議としつくりと来た。

何故こんなことになっているのかを思い出そうとして、啓人は頭が割れるような頭痛に襲われた。

うずくまる。目を瞑る。こめかみを抑ようとして、両の手が動かない。

そこで自分の腕を見て、思考が固まった。腕は動かないように縄で嚴重に縛られていた。足を見ると、足も同様に縛られている。

知らない部屋。知らない場所。謎の頭痛。縛られた手足。

頭痛などまるでなかったように頭痛が治まった啓人はここに至って、初めて自分の危機的状況に気付いた。幸い、動かないのは腕と足だけだ。ベッドから起き上がるうと思えば起き上がることはできるかもしれない。

啓人はなんとか助かろうと思いを走らせる。あまりの状況にアドレナリンでも大量に出ているのか。不思議と啓人の思考を困惑が鈍らせることはなかった。

叫べば助けが来るか？ 否。ここは敵地だ。叫んでも来るのは敵だけである。

暴れば手足は自由になるか？ 否。暴れば人が来る可能性がある。何故自分が生かされているのかはわからないが、敵を刺激しないに越したことはない。

警察などの助けが来る可能性はあるか？ 否。ここは日本ではない可能性が高い。ならば自分がいないことに気付いても場所を割ることは困難だろう。

脱出は可能か？ 否。否。否。

思索の末に、啓人は脱出が不可能であることを悟った。

しかし、死を覚悟するにはまだ早い。啓人は思う。自分が生かされているのには、何らかの理由があるはずだ。脱出ができないならば、糸口を見つけるまでだ。

自分が起きているのに気付かれたら面倒なことになりそうだと考えた啓人は寝たふりをしたまま糸口を探す。

不意に、カツ、カツ、カツ、という足音が啓人の耳に届いた。啓

人は一旦思考を止め、全力で息を殺した。足音が通り過ぎるのを待っている、足音が扉の前で止まった。

啓人は手のひらに汗がにじむのを感じたものの、すぐに覚悟を決めた。それとどちらが早かったか、ガチャ、という音とともに扉が開く。

啓人は、入ってきたのはどんな人間かと薄目を開けて確認した。その容貌の異常さに、啓人は目を見開きそうになるのを必死でこらえた。

視界に入ったのは、フォーマルな黒のスーツと、中折り帽の乗った翡翠色の長髪だ。物静かな雰囲気と漂わせる男の金の瞳が一瞬、猛な肉食獣のそれに変わった気がして、目を逸らしそうになる。

薄目でも開けなければよかったと後悔した。この男は只者ではない。それを、啓人は男の身のこなしから判断していた。

男は啓人が目覚めていることに気付いているのかいないのか、ベッドに横たわる啓人に近づいてきて、ベッドの傍らに置いてある椅子に座った。そして啓人をしばらく無言で見詰めた後、おもむろに脚の拘束を解いていく。

すると足を結んでいた縄がほどかれていく。啓人はここで、どうするべきか悩んだ。この流れで行くとおそらく腕の拘束も解かれるのだらう。しかし、その真意がわからない。わからないまま足を結んでいた縄がほどかれ、腕に移った。

縄をほどき終えると、男は啓人に背を向けて立ち上がった。そして、扉へと歩き出す。

啓人が狙ったのはその瞬間だった。この男は今倒してしまわなければ、脱出するときに必ず障害となる。それは明白だ。だからこそ、自分に隙を見せた今が好機だと思ったのだ。

しかし、しかし、だ。

啓人の考えは浅はかだった。何故わざわざ男が自分の拘束を解いたのか。時間はなかったとはいえ、それを考えるべきだったのだ。

それに気付かない啓人は、男の意識を一撃で刈り取ろうと脳天め

がけて貫手を放つ。手加減だとか、容赦だとかいう言葉は啓人の頭には一切なかった。いくら武術の心得があるとはいえ、それがあまりにも異常であることに啓人は気付いているのだろうか。

渾身の一撃。啓人の放った技は、一撃で決めるためのものである。男は、後ろを振り向くこともせず、その貫手を横から掴んで見せた。その瞬間啓人を覆った感情は、絶望に近かった。

「六十点です」

微笑とともに下される採点。試されている。半ば直感したが、そんなことを気にしている場合ではなかった。金の瞳と目があつて、鳥肌が立った。啓人は心に湧いた恐怖を見なかつたことにして攻撃を続ける。自分の感情を完全な絶望に代えないために。

首筋をめがけた回し蹴り。これもまたあつけなく止められた。しかし今回は必殺の覚悟で放たれた先ほどの貫手とは違い、止められることは織り込み済みだ。首にたどり着く直前でとめられた足を支軸に、流れるような動作で体を更に回す。啓人の身体が浮いた。その勢いのままもう片方の足を先ほどとは逆側にある肩へと踵を振り下ろした。

狙ったのは人体の中で最も折れやすいとも言われる鎖骨である。このままでは絶対に勝てないとわかっている男を相手取るのに、まずは人体に損傷を与えていこうというのだ。

「諦めない姿勢。それは満点ですが、先ほどから考えが浅いですよ」

踵が男の肩に届く前に、浮いている上体が動くのを感じた。男が掴んでいる啓人の右足。男はそれを片手でがっしりと掴み、振り返るようにして自分の背後の床へと叩きつけて見せた。

片手で体を振りまわされるとは考えていなかった啓人は受け身を取ることすらままならない。

「がつ！」

床へと叩きつけられた啓人は息が詰まった。ほぼ反射的に自分の身体を確認する。骨は折れてないか。何か異常はないか。幸い、どこも損傷を受けた様子はなかった。

しかし、確認したのがいけなかったのか。あおむけに倒れている啓人の頭へと、掌底が飛んでくるのを啓人はみた。気付いたときにはもう遅い。天井を向いて倒れて視界が悪くなった啓人の視界に入ったということは、その攻撃は既に眼前に迫っているということである。

啓人は掌底をまともに受け、自分の命の危険を感じながらも意識を手放した。

## 02話 危機（後書き）

戦闘描写が下手……

誤字報告・感想まっています。  
感想は私の気力に直結します！

### 03話 説明(前書き)

世界観の説明むづい……  
テスト勉強より集中しなきゃできませんでした

### 03話 説明

啓人は再び同じ部屋で目を覚ました。そのことを、啓人はあまりにも冷静に受け止めていた。そんな自分が空恐ろしく感じられて、呟いた。

「……異常だな」

「異常。それは、何がですか？」

聞いている者などいないと思っていた呟きにやけにもったいぶった口調で反応したのは、先ほど啓人をあっさりと倒して見せた男だった。声のしたほうに目をやると、どこか気品の感じられる女が、ベッドの隣に置かれた椅子に静かに座っていた。着ているのは、豪華なドレス。啓人はアニメなどは見ない人間だったが、啓人の頭にはどこかファンタジーな世界が思い浮かんだ。

いたのか、と啓人は苦々しく呟いて男の問いに答える。拘束を解かれているままなのは気付いていたが、啓人の戦意は既に喪失していた。ここでやりあってもまた至極簡単にのされるのは明白だったし、もうどうにでもなれと自棄になっていると言っても過言ではない。

「俺が、だ。もう死ぬかも知れないっていうのに取り乱しもしないのはどう考えてもおかしいだろう？」

そう話しているうちに、啓人はまだ異常なことがあることに気付いた。

「それに、この状況もだ。そもそも命の危険があるっていうこと自体俺の周りじゃ異常だし、俺があんとまともに……まともにつっ

ても一方的だったけど、戦闘したこと自体が異常なんだ。俺は確実にあんたの命を取りにいった。考えれば考えるほど異常じゃないことを見つけることのほうが難しいな」

啓人の言葉を聞きながら、二人はあまりの好感触に表情には出さずにはくそ笑んでいた。これは思っていた以上の拾い物かもしれない。啓人が異常であればあるほど、そしてそれを認識していればいるほど、二人には都合がよかったのだ。

「……そうですか。甘い世界で育ってきたのですね」

心中の歡喜を隠しながら、女は意図してやや厳しい言葉を吐きかけた。

無論、啓人を試すためである。この二人は、何度でも啓人を試す。自分たちの目的を遂行するために、啓人が即戦力とはなり得ないにしても、彼がどれほどのものなのかをより精密に知るためである。

「……甘い、ねえ。俺にはその感覚は分からないな。なにせ、あんなの言つところの甘い世界しか知らない」

そう言いながらも、啓人は戸惑いを禁じえない。今、女は世界と言った。しかも、啓人の住んでいた場所を知らないような口振りである。それでは、どのように自分をここまで連れてきた……？

啓人の言葉を受けた女はゆっくりと頷き、男に目配せをした。合格です。そういうかのような視線が返ってくる。女はもう一度頷いた。

「あなたに何が起こっているのか、知りたくないですか？」

啓人は即座に首肯した。尋ねたもののどう説明したものかと頭を

悩ませていると、代わって男が前に出て説明を始めた。

「まずは、根本的な説明をしましょうか。ここを信じてもらえないことには、どうしようもないという部分なのですが」

信じる、という部分に啓人は首をかしげた。今でさえ信じられない状況にいるのだ。それを置いて、なにかあるのだろうか。

しかし、そんな疑問ですら大破するような爆弾が投げ込まれた。

「ここはあなたのいた世界とはまるつきり違う世界です。ちなみにこの場合の世界というのは、抽象的な個人個人の見ているものという意味ではなく、そのまま様々な国の集合体という意味なのですが……説明が分かり辛いですね。そうですね、あなたの知っている国の名前を一つ挙げてもらえると助かります」

大体落ちが読めてきた啓人は、問われるままに母国の名を挙げた。

「日本」

落ち着き払った黒服から返ってきたのは果たして、予想通りの返答だ。

「大体予想はできてるとは思いますが、そんな国はありません。私の言う世界とはそういうことです。そもそも、この世界に国は四つしかありません。ちなみにここは、ラディン王国という国です」

やはり、ここが異世界だともいうのか。しかし啓人は、それを嘘だと一蹴することをしなかった。嘘だと一蹴するにしても、自分は囚われの身である。何を言っても無意味だということは十分に分かっていたので、啓人はとりあえず信じてみる道を選んだ。

何を言えばいいのか分からない啓人を横目に、男は話を続けた。

「反論がないようなので続けますが、実は信じてもらいたいことがもう一つ」

信じてもらいたいという言葉は、男たちに圧倒的優位に立たれている啓人からしてみれば信じろという脅迫と同じだ。圧倒的優位を盾にした要求に、呑まないという選択肢はそもそもが存在しないに等しい。

「この世界には魔術というものがあります。それは自分の心、つまり精神力を糧として使うものです」

なんとというファンタジー。啓人の感想はそれに尽きた。しかし、この男がそうと言うからにはそれは正しいのだろう。疑問はあったが、それを言っても実在するというのだから仕方ないということを啓人は分かっていた。故に、首を傾げながらも啓人は沈黙を貫く。

「魔術を用いるのに通常、言霊というものが使われます。それは例えば……そうですね、少し実演してみましようか」

そう言つて、黒服は部屋の全ての窓を閉めていった。女がそれに口を挟んだのは、男が丁度部屋の扉まで閉め終わり、完全な密室になった時だった。

「クラウド。そこから先は私がやりましょう」

「了解しました。確かに、ここからは姫様が適任でしょう」

クラウドという名前らしい男が女のことを姫様と呼んだのが啓人は気にかかったが、その疑問は黒服に目で制された。

女はそんな二人を気にした様子もなかった。

「では、とりあえず実演しますので見ていてください」

そう言つて女は次第に目を細め、やがて眼を閉じた。知らずのうちに、啓人は女の拳動に注目していた。

まだ、女は動かないのか。実際には一秒にも満たない時間が、その時の啓人には果てしなく長く感じられた。そして、啓人が瞬きをして目を開けたその瞬間。

「疾走れ」

たった三音が、部屋の中の空気という空気を震わせた。その声は、まるで啓人の頭に直接響いたように感じられた。啓人がその声に特殊なものをかんじたのは、それだけではなかった。

ガタガタと、閉じられた窓が鳴る。パラパラと、化粧台の上に無造作に置かれた本がめくられていく。風を、確かに感じるのだ。風が、吹き荒れている。四方から吹く風に、啓人はうつつとしいといった様子で頭をふった。閉鎖されているはずのこの環境で、何故か。その亜麻色の髪をたなびかせながら部屋の中央で微笑をたたえて自分を見ている女に、強い畏怖を感じた。この怪奇な現象が起きたのは、この女の声が響いてから。つまり、この女の一言が密室に風を起こしたのだということが、分かってしまったのだ。

「これが魔術、か……」

「ええ。そして先ほど私が発したのが言霊です」

啓人の半ば確信を伴った呟きに、女が補足した。次いで、女が説明を再開する。

「まず説明すべきは、言霊ことたまでしょうか。言ことの霊たまと書くこれは、その通り言葉に宿るとされている霊的な力のことです」

女の説明に、啓人は頷いた。啓人も言霊という言葉には聞きおぼえがあり、聞きかじった程度の知識でもそれぐらいは分かった。

そんな啓人を一瞥して、女は言葉を続けた。

「そして、霊的な力とはだれしも持っているものですが、それはだれしも持っていないもの。一般に精神力と言われるものです」

その説明に、啓人は眉を寄せた。わかるようで、わからない。そんなもどかしさが啓人の頭を埋めていた。

気にせず、女は啓人に理解できるように言葉を紡ぐ。この作業は女にとつて難しいことであつた。何故なら、啓人が理解に苦しんでいるのはこの世界の住人にとっては感覚的に理解できる程度のものでしかないからだ。世界が違えば、こんな当然のことも通じない。そのことを、初めて実感した気がした。

「精神力とはすなわち、心の強さです。更に心の強さとはすなわち、感情の大きさ。つまりより大きな感情が乗せられた言葉が初めて言霊となるのです」

適切な言葉が見つからない。そんな表情でなされた説明に、啓人はなにかを掴んだような表情をした。親指で眉間にふれながら、啓人は思考しつづ言葉を発した。

「つまり……それは、大きな感情に生命力が宿っているからと、そういうことか？」

黒服と女が、そんな説明の仕方があつたかと深く頷いた。それに

促されるように、啓人が推論を続ける。

「つまり、言霊に生命力が宿っているから、その言霊の生命力を交換して先ほどのように風を起こすのが魔術だと？ いや、言葉に力が宿るといふのだから単にそれだけじゃないのか……。言霊の生命力を変換して……他にもなにかできると？」

啓人が興奮を隠そうともせず二人に問う。二人は満足げに首肯して、女が質問に答えた。

「ええ。水を発生させたり、火をおこしたり、電気をおこしたり。およそ生命に関することならばなんでも。一つだけ、できないこともありますけど」

「一つだけ？ 何ができないんだ？」

「それは、人体に直接危害を加えることです。死ね、といったところで相手は死にません。考えてみれば、自分から削り出した僅かな生命力で生命力の塊である人体に干渉することができないのは当然なんですけれど」

笑いながら、女は言った。自分の疑問が解消されて満足したのか、啓人は我に返った。しかし、ここまでの会話でこの二人が自分が二人の期待を裏切るようなことをしなければ害意を持たれるようなことはないだろうとあたりをつけていたので、そこまでうるたえることとはなく聞いた。

「で、俺のことをこんな愉快的な世界に招いてくれたのはあんたたちか？」

「いいえ。貴方をこの世界に召喚したのはガラム帝国。敵国です」

思わぬ否定に驚いたものの、啓人は質問を重ねた。

「じゃあ、あんた達は誰だ？」

その質問に答えようとする女を制して、黒服が前に出た。

「私は、クロウド。ただの執事です」

それを聞いて、啓人はこの男の恰好に納得がいった。この黒服が執事服と呼ばれるものなのだろう。逆に、クロウドの言ったただの執事に負けたことに驚きもしたが。

「……クロウド。名前はそれだけか？」

「ええ」

不躰ともいえる啓人の質問に、クロウドは気を悪くした様子もなく首肯する。啓人はクロウドと握手を交わして、女の方に目をやった。

「……で、あんたは？」

軽い気持ちで聞いた質問に返ってきた答えに、啓人は目を見開いた。

「ラディン王国王女。ミラ・パトリシアです」

### 03 話 説明（後書き）

感想・評価はお気軽にどうぞー

## 04話 条件（前書き）

一か月以上も間が空いてしまいました。  
もっとほんぽん書けるようになりたいです。

## 04話 条件

もしも、人が一人ではその課題を解決できないと他者に判断されたとき、一般的にはどのような対応をするのだろうか。

自分では力が足りないと知って、自身の無力に打ちひしがれるだろうか。人の力を借りる口実ができたとして、歓喜するだろうか。そもそもやる気のなかった課題だから関係ないと言いながら、少しの罪悪感に苛まれるだろうか。

思うに、多くの人間はこのような反応を示すのだろう。しかし、ここにまた一味違った反応を示す人間が一人。神谷啓人。異世界から自身の意志とは関係なくやってきた人間だ。

彼は憤慨していた。彼がラディン王国王女ミラ・パトリシアに保護されてから早三ヶ月。その間に啓人はこちらの世界の共通言語であるガルム語と、彼の滞在する国の言語であるラディン語を完全にマスターしていた。ガルム語はどういうわけか話すことはできたために読み書きをおぼえるのは比較的容易だったが、それでも二ヶ国語をマスターするには、それはあまりにも短い期間であった。

そんな彼が憤慨しているのは、二ヶ国語を習得する合間にも貪欲に魔法の練習をする彼を見てミラが出した課題が間接的な理由だ。課題といっても、それがミラに保護され続けるための条件のようなものであると啓人が察するに、そう時間はかからなかったが。その課題とは冒険者ギルドで冒険者登録をして、難易度Bの依頼を達成してくるといふものだった。ただし、それに付与された条件が一つ。それは、依頼を一人で達成しないという制約だった。

彼の心を荒立てたのは、この制約である。別に、彼は誰の助けもなく、確実に依頼を達成できると思っっているわけではない。思っっているわけではないのだが……せつかく魔法などというものを覚えたのだから、一人で誰に気兼ねすることもなく力を試したいというのが彼の正直な心持ちだった。

元の世界に居たころも、彼には似たようなところがあった。彼は異様に自分の力を磨き上げ、知りたがる。思えば、彼が元の世界で孤立した原因も彼のそんなところにあつたのかもしれない。彼の関心事のほとんどが、元の世界では全くといっていいほど関係のない『強さ』に占められていたことに。

今の彼の姿もそれと変わりない。中世のヨーロッパをイメージさせる町並みや服装も、時折啓人のように鎧を着こんでいる人間がいることにも、ミラに渡された地図を片手に冒険者ギルドを目指して黙々と歩き進む彼は、大した関心を示さなかつた。彼が今の滞在先である城を出てから殊更に目を引いたものといえば、多くの人間に紛れて見かける明らかに耳の長いエルフと呼ばれる種族や、動物の耳や尻尾が特徴的な獣人と呼ばれる種族くらいのものであつた。

そんな彼が視線をふいと右上に跳ね上げたかと思いきや、そのまますぐに立ち止まつた。啓人が見上げた先にあつた看板には、大きな文字でこう書いてあつた。

『冒険者ギルド』

つまりそれは、彼が目的地に到達したということだつた。

冒険者ギルド内に立ち入つた啓人が最初にしたことは、周りを見渡すことだつた。それは受け付けを探すためであり、ギルドがどのような場所で、内部にはどのような人間がどれほどの比率で存在しているのかを見極めるためだ。

ギルドは酒場のような雰囲気を醸していた。それは、ギルド内部

で実際に酒の販売を行っていることに無縁ではないのだろう。男女の比率は、男が八に対して女が二だろうか。女を引っかけようとしている男が目立つが、周りはそう気にかけてもいないようだった。

食堂のような配置の酒の販売所と座席に、それを囲うように掲示板があった。掲示板に不規則に張られた紙には依頼が書いてあるのだろうと啓人は当りを付けて、掲示板のない場所を発見した。そこが受け付けであることを確認すると、啓人は受け付けまで悠々と歩いて行く。

「冒険者登録をしたい」

「承りました。冒険者についてのご説明は必要でしょうか？」

受付嬢にそう問われて、啓人は逡巡したのちにうなずいた。冒険者といっても、その職業に対する認識は曖昧だ。感覚的にしか理解していないし、説明があるのならばそれに越したことはない。

この質問に対して頷く者は少ないのか、受付嬢は不慣れな様子で説明を始める。

「冒険者とは……一般的にここのようなギルドで依頼を受けそれを達成することによって報酬を得ることを仕事としている人々の総称です。依頼はこの街での雑用のようなものから、ここ一帯の近隣で出現する魔物の退治まで様々です。この依頼には簡単なものから、EからSSまでの難易度が設定されており、達成した仕事の平均難易度に応じて冒険者ランクが設定されます。依頼を失敗したことでよって、ランクが下がることもあります」

「新たに冒険者登録をした場合のランクは？」

「今回は受付嬢も定みなく答える。」

「最低ランクのFランクになります。しかし、どんな依頼でも一つ

達成すればEランクに昇格するのでFランクというのは登録したきり一つも依頼を達成していないか、そもそも依頼を受けていないほんの一握りです」

「自分のランクよりも難易度が上の依頼を受けることは？」

「可能です。しかし、それで依頼中に負傷、死亡した場合、ギルドは一切関与いたしません。自分のランクより低い難易度、または同難易度で負傷した場合は治療費の一分割が支払われ、死亡した場合には今までの実績に応じた金額が親族に支払われます」

それを聞いて、啓人はもう一度うなずいた。つまり、駆け出し冒険者に出してやる金は一銭もないということだ。聞きたいことはあらかた聞いただろうか。聞き漏らしがあったとしても、次の機会に聞けばいい。啓人はそう判断して、受付嬢に冒険者登録を始めるように頼んだ。

「お名前を教えてくださいませんか？」

「神谷啓人」

「カミヤ・ケイト様ですね。それではカミヤ様。身分証の提示をお願いします」

言われて、啓人はミラから渡されていた身分証を懐から出した。もちろん偽造などではない本物である。渡された時は、王族ともなれば、戸籍を一つ作るくらい訳ないらしいと啓人は苦笑したが、そのおかげでこうやって暮らせているのだから感謝していないわけではない。

それにしても、名前を聞いてから身分証の提示を求めるとは、中々上手いことをするものだ。啓人は感心した。これならば、おそろく偽名を使うような者をギルドに侵入させることもないだろう。もっとも、身分証を偽造されればこの方法ではどうしようもないが、そこは別の方法で何とかするのだろう。

「確認が終了しました。これにて冒険者登録は終了とさせていただきます。ちなみに当ギルドには決闘というシステムがございますが、それについてはこちらをご覧ください。他にご用はありでしょうか？」

いや、と否定して啓人は受け付けを去った。背中にかかったご武運を、という声に手を挙げて応じ、掲示板でBランクの依頼を探す。しばらくしてBランクの依頼が一つしかないのを確認すると、ミラに教えられた依頼の受け方に従って掲示板から依頼の内容が記された紙を引き剥がした。それを先ほどの受け付けまで持っていきこうとしたところで、肩に手を置かれて引きとめられた。

「待てよ、新入り。その依頼の難易度はBだぜ。最初の依頼として選ぶには荷が勝ちすぎるような気がするが？」

啓人が振り返った先に居た男は笑みを浮かべていたが、その笑みに生理的な嫌悪を覚えた啓人はすぐに目を逸らした。しかし、男が真剣に啓人の身を案じて声をかけたという構図になっているので、声を返さないわけにはいかなかった。

「構わない。ちょっとした力試しだ」

「それなら他のにしておきな。もう少し難易度を落としたりいいじゃねえか」

男の少しだけ焦った様子に、啓人は男がこの依頼書を欲しがっているのだと理解した。他にもBランクの依頼があるのなら啓人としてはそれでもよかったのだが、これしかないのだからそういうわけにもいかなかった。

「悪いが、おれが必要なのはBランクの依頼だけだな。他を当たれ」  
「そう言つなよ。あつちの姉ちゃんはその依頼を手に入れてくれば一緒に依頼を受けてもかまわないって言ってるんだ」

男が示す方向に目を向けると、そこには確かに女が二人ほどいた。赤毛の女は勝気そうな笑みを浮かべてこちらの様子を見ているようだったが、もう片方の白髪の女はどこか申し訳なさそうな顔をしていた。

「いい女だろう？ なんなら、付いてきてもいい」

確かに二人とも顔は整っていたし、白髪の女のほうは特に啓人の目を惹いた。しかし、この男が付いてくるといふのなら話は別だ。もともと啓人としては人数が多くなりすぎるのは自分の力を試せる機会が減って好ましくないし、この男はそれ以前に信用できそうもないというのが正直なところだった。

「残念だが、依頼は渡せないな」

あくまでもそっけない啓人の態度に、はじめは友好的だった男もイライラとし始めたようだった。それから数度問答を繰り返した果てに、遂に男の堪忍袋が切れた。

「そつかよ新入り……それなら……」

男が獰猛に笑う。男の発し始めた剣呑な雰囲気、啓人は無闇な威嚇は自分の価値を下げるだけだと声には出さずに笑った。しかしその嘲笑は男の耳に届くことなく、男の放った雷のような叫び声にかき消された。

「 決闘だ！」

その叫びに赤毛の女が会心の笑みを浮かべるのに、啓人は気付く  
ことがなかった。

## 04話 条件（後書き）

四話目でもうタイトルにつける熟語のネタが切れてきただなんてそんな馬鹿な……

## 05話 思惑

「うんうん、上手くいったみたいね！」

『決闘』の言葉に自分の目論見が当たったのを感じとって、ローズは自慢の赤毛を振り乱して隣の友人の体に自分の顔をうずめるように抱きつきながら歓喜の声を上げた。それを受けたアイネは、微笑みながら自分の腹部にあるローズの頭を撫でて応じる。

「でも、ローズちゃん。なんであんなことしたの？ 確かにあのレビンとかいう人はしつこかったけど、わざわざ他の人に迷惑をかけるようなことはしなくても……」

しつこく自分たちをパーティに誘ってきた男に決闘を申し込まれた男を一瞥して、アイネは首をかしげた。所詮は他人からの分析にすぎないが、ローズは何の理由もなく他人に迷惑をかけるような人間ではなかったはずだ。少なくとも、幼いころからローズを知るアイネの記憶にはそんな出来事は起こったことがなかった。

同じ年齢だというのに随分と落ち着いた仕草で考えるアイネを下から見上げながら、ローズはほんの少しだけ申し訳なさそうな表情を見せた。

「理由の大部分は、ただ決闘っていうのがどんなものか見ておきたかったんだけど……丁度依頼を持ってる人がいたからつい……ごめんなさい」

確かにアイネも、決闘というものについて気にならないこともなかった。もういくつものギルドにいったことがあるが、決闘などというシステムを取っているギルドはここが初めてだ。決闘というの

は受付で渡された説明書によると、受けたい依頼が他の冒険者とかぶったときにただ武力で勝負をして勝者が依頼を受けることができるといふ至極単純なものだったが、やはり実際に経験したことがあるのとないのでは違う。それに、決闘の勝敗に関してだけは賭けごとを行うこともできるようだった。

親にいたずらを見咎められた子供のよ様な態度のローズをみながら、アイネはいったん思考を終了させてため息をついた。そんなアイネを見て、ローズは焦ったように言い訳を始めた。

「でも！ でもね！ ちゃんと他の理由もあって、あの人も私たちみたいにこのギルドは初めてみたいだったし、これをきっかけにあの人のことを知りたいなって。それに、あのレビンってやつぐらの相手になら勝てそうに見えたり！」

「……まあ、それならいいかな？ ……いいのかな？」

確かに、あの人は私たちももらった決闘の説明の書類を持っているし、ここでは見かけない黒髪をしているからこの人間ではない確率が高いだろうとアイネは納得した。それにローズの言葉通り、アイネは男からどこか風格のようなものを感じていた。

間違いなく装備は新品のようだったが、それでも駆け出しの冒険者には見えない何かがある。レビンは新顔だというだけで油断して、頭に血が上って決闘を申し込んだようだったが。

「それとも、あのレビンとかいう人にはたいていの人には勝てる力があるのかな……」

「どうだろ？ 別に、弱くはないみたいだけど」

思わず漏らした思考に帰ってきた言葉を受けて、アンネは思考を断ち切った。

「それでね、ローズちゃん？ あのレビンとかいう人が勝っちゃったらどうするつもりなの？ その場合は私たちがあの人と一緒にあの依頼を受けることになるけど」

アイネの言葉に対してローズは無邪気に、何の心配もないというように答えた。

「大丈夫。そもそもあの人、負けないと思うし。下手したら私たちよりも強いもん。あんな下心丸出しの男に負けるわけないって。…ま、勘でしかないんだけど」

アイネはまた勘なのかと言わんばかりにため息をついて、しかし最後には諦めたように笑った。不思議なことに、ローズの勘はよく当たるのだ。

「なるほどな……」

啓人は受け付けで渡されたばかりの書類に目を通し、大雑把ながら決闘に関することを把握した。啓人は中々上手いシステムだと感心するばかりだった。賭けは周りを見るにどうやらギルドが元締めをやるようだったし、冒険者からしてみれば体のいい娯楽になり、ギルドからしてみれば対応の面倒なトラブルを解決でき、さらに賭け金が手に入るといいことづくめである。

そんなことを考えている啓人の前に、先ほどの受付嬢が現れた。

「来て早々、面倒なことに当たったみたいですね」

受付嬢の顔に浮かんでいるのは、少しの憐みである。それもそのはずだ。いくら啓人が駆け出しの冒険者には見えない雰囲気を感じているといっても、登録を行った張本人である彼女は彼が駆け出しの冒険者にすぎないということを一番よく知っているのだから。

「そつだな……だが、本当に面倒なことかどうかは相手次第だ。それに、冒険者というものが普通はどのくらいの強さなのかを知りたい機会だとも考えられる」

そんな受付嬢の思惑を全く気にする様子もなく、啓人は相も変わらず落ち着いた様子だった。そんな啓人に受付嬢は目を見開いたように見えた。

「いろいろと、考えてるんですね……カミヤさんなかなかいい冒険者になりますよ」

受付嬢は素直に感心した様子で、まじまじと啓人を見詰めたあとにそういった。確かに、啓人の言ったことにも一理あった。なんの依頼を受けたこともないというのは、実力が未知数であるという風にも考えられるのだ。啓人は称賛を所在無さげに受け止め、咳払いを一つした後に関うた。

「それで、何の用だ？ まさか、世間話をしに来たというわけでもあるまい」

「またまた。どうせカミヤさんならわかりでしょう？」

段々と受付嬢の態度が砕けたものになってきているのを感じながらも、悪いことではないと啓人は苦笑して首を横に振った。

「お前の考えていることが、まだ会ったばかりの俺に分かるわけがないだろう」

「じゃあ、予想してみてください。それぐらいならできますよね？」

どうしても啓人に答えさせたいようで、受付嬢は啓人に予想を求めてきた。啓人は間違っているかもしれないが、という前置きから自分の予想を述べ始める。

「考えられるとしたら、俺を決闘する場所まで案内しに来た……とかだな。いくら金になるといつても、まさかギルド内で戦闘をさせるわけにもいかないだろうしな」

啓人が予想を口に出すと、受付嬢は目に見えて肩を落とした。そんな自分の答えが気に食わなかっただろうか。啓人は疑問を感じた。

「その通りです。……啓人さんみたいな人に駄目出しとかしたかったですけど」

そんなつぶやきが聞こえて、自分は間違えるべきだったのかとどこか理不尽に感じながら、啓人は受付嬢にギルドの外に連れて行かれた。

## 06話 決闘（前書き）

まさかの6000字じゃ……。一話に分けるべきでしたかね。

## 06話 決闘

案内されるまま少しあって、ここですという言葉とともに受付嬢が立ち止まったのは何とも形容しがたい建造物の前だった。そう、建造物だ。啓人の立つ場所からは全容を掴むことはできないが、それでも建物という言葉は似つかわしくないことは直感的に悟ることができた。

赤茶けた外壁が広大な地面を円環状に囲み、囲まれた大地を空から守るように鉄色の格子がドーム状に蓋をするその光景が、それを見るものに物々しい雰囲気を感じとらせるであろうことは想像するに難くない。土臭いその建造物は、どこか監獄のようにも見えた。

「……これは、スタジアムか？」

その建造物の全容を把握することができたわけではないが、啓人は自分の世界に似たような形のものがあったと思いだし、口にしたもちろん、彼の知るスタジアムはこれほど見るものを圧迫する雰囲気醸してはいなかったが。

「いいえ。スタジアム　いわゆる競技場ではなく、ここは闘技場です」

啓人の問いかけに対して答える受付嬢は、平然とそう言ったのけた。

深く、深く。啓人は息を吐きだした。緊張するだなんて柄ではないと思いつつ、それも仕方ないことかと啓人は嘆息した。なにしろ受付嬢はここが選手控え室なので呼ばれたらこっちの扉をあけて出てください、としか説明していかなかったのだから。職務怠慢も甚だしいが、案内されなければ決闘を行う場所に来られなかったのだから、啓人としては感謝していないこともない。

そんなことを考えている間にも、まだかまだかと決闘を急かすように、それでいて決闘から逃げるように啓人の心臓は主張を続けていた。気分を落ちつけるために、啓人は格子状の扉から会場を観察した。会場へ入るための扉が格子状だから、囚人になったように気分が落ち着かないだと半ば八つ当たり気味に思いながらだが。

会場を見て啓人が思ったことは、やはりスタジアムのような、ということだった。外壁に沿って存在する階段と同化したような観客席がその最たる例である。啓人の知るスタジアムと違う点といえば、地面がなんの加工も施されていない点ぐらいである。もっとも、決闘などというシステムがある以上、清掃を欠かさない程度の配慮はされているのだろうが。

「ただいまより、決闘を始めます！ 両者とも、闘技場内へご入場ください！」

いきなり響いた声に驚きつつも、啓人は格子状の扉を押して闘技場へ入った。それと同時に、相手の男が自分の反対側の扉から闘技場へ入ってくるのを啓人の目が捉えた。男の落ち着いた様子を見るに、どうやらこれが初めての決闘ではないようだと思われ、啓人は推測した。

「みなさん、おわかりのことと思いますが、ルールを説明させていただきます！」

闘技場を風が吹き抜け、司会者の声が響いた。緩やかに吹く風に司会者を見て、啓人は怪訝そうな表情を浮かべる。司会者はマイクを持っていなければ、拡声器の類のものも持っていなかったのだ。

「ルールは単純明快です！ 相手を気絶させるか、倒した相手が十秒以内に立ち上がることができなければ勝ちです。魔術を使うのも、相手を殺さない程度であれば許可します。ただし、相手を殺してしまつた場合には犯罪となつてしまうのでご注意ください！」

武器を持つて入つてはいけませんと受付嬢に言われたのはこういうことだつたかと啓人は思い出しながら、再び吹き抜ける風に司会者が何も持つていないことについて自らの中で結論を出した。おそらくは、司会を始める前に風魔法を使い、その風が会場内に声を運んでいるのだ。実際に、啓人の推論はほぼ間違つていなかった。ほぼ、というのは風魔法は今もなお使われているということだ。啓人からは見えない場所で他の人物が風魔法を使い続け、その風が声を運んでいた。

「それでは、今回の決闘者たちの紹介に入りましょう！ 決闘を申し込んだ挑戦者はこちらです！ 今回はその巨体からどんな攻撃を見せてくれるのでしょうか！ 冒険者ランクはBランク、レビン・アーティです！」

「うおおおおおおおおおおおお！」

歓声は、もはや怒声だつた。この広い闘技場で観戦しているのはギルドに居た人物とただの野次馬だけで、観客席は二割も埋まつているか怪しいというのに、それは地鳴りしているのかと錯覚するほどだつた。それほどまでに、男 名前はレビンというらしい 人気があるのだろうか。決闘を挑んできたときの短気さから見て人間性で人気があるわけではないと思うから、レビンは決闘でそれ

ほどの実績を残しているのだろうと推測できた。

「決闘を申し込まれたのはこちらです！　なんと今日冒険者として登録を済ませたばかりという、その風格に似合わない経歴！　実力は全くの未知数！　彼の冒険者としての始まりは勝利か、それとも敗北か！　フランクの冒険者、カミヤ・ケイトです！」

会場がどよめいた。何の反応もないよりはマシかと啓人は頷いた。何の反応もないということは完全に勝ち目がないと思われるということだが、このどよめきは少なくとも自分に賭けた者が何人かいるということだろう。先ほどの歓声を顧みるに、それでもほとんどはレビンに賭けたようだったが。

「両者、所定の位置につき準備が整い次第手を挙げてください！」

その言葉に、レビンは闘技場の中央へ歩いていく。それを見て、所定の位置が分からない啓人は真似をするように中央へ歩いた。歩いているうちに、中央のほうに銀のプレートが二枚地面に埋め込まれているのが確認できた。プレートの間に取り残されている距離は十メートル程度だ。そういうことかと、啓人がプレートに乗った。すると、プレートに乗らずにあの寒気のするような笑みを顔に張り付けてレビンが話しかけてきた。

「おうおう、駆け出しくん？　棄権するなら今のうちだぜ？」

啓人はそちらを一瞥し、あくまでも淡々と言い返した。

「なんだ、駆け出しに負けるのが怖いか」

敵意どころか、およそ自分に対する感情というものが見えないそ

の瞳に、レビンはたじろぎ言葉に詰まった。実際、啓人にとってレビンは冒険者の實力を知るための観察対象にすぎなかったのだ。勝てるかどうかは別として、だが。本人にその意図はなかったが、啓人はまるで畳みかけるように言葉を継いだ。

「なに、恥じることはない。誰だって積み重ねた実績をなんの積み立てもない相手に粉微塵にされるのは恐ろしい」

啓人としては、一般論を述べたつもりであった。しかし、その言葉はレビンにとっては度し難い挑発として響いたようだった。

「……いい度胸じゃねえか。駆け出し程度が、この俺に喧嘩を売るとはよお」

挑発をしたつもりが逆にこちらの頭に血が上る結果となり、レビンは苛立ちを隠すこともなく、プレートに乗った。それを見てとった啓人は、忘れていた緊張がぶり返すのを感じながら手を挙げた。それに呼応して、レビンも手を挙げる。

「両者、手を下げてください」

お互いに手を下げ、拳を握って構えをとった。全身から、適度に力を抜いていく。体に無駄な力を入れないことを意識し、レビンを見据えた。だんだんと、心臓が落ち着いていくのを感じる。

「それでは、始めの言葉とともに両者決闘を始めてください」

声が響いても両者ともに司会者を見ることはなく、相手から目を離さなかった。見るのは相手の目ではなく、体だ。目の動きなんてものは自然と気付くものだ。大切なのは、相手の繰り出す技の予備

動作を見逃さないことである。

「始め！」

その言葉が響いて、啓人、レビンの両名がしたことは強化の魔術を使うことだった。

「満ちろ！」

強化の魔術は初歩中の初歩である。自分の放出した生命力を、どれだけ自分の周囲から自らの体内に還元した生命力が上回るか、という魔術。この魔術において大切なのは、自らの限界まで生命力を取り込むことである。体の中に存在できる生命力には、限界がある。限界まで周囲の生命力を取り込むことができ、ようやく強化の魔術が「使える」と判断されるのだ。

お互いに強化の言霊を発したのは決して偶然などではない。決闘が始まった瞬間に強化の魔術を使うのが定石だということぐらい、もう何度も決闘をこなしているレビンは言うまでもないことであつたし、異世界からやってきた啓人も言語の習得の合間に何度かしたクラウドとの組み手で心得ていた。

「すぐに決着をつけてやらあ！」

強化の魔術によって身体能力が大幅に向上されたレビンは体の重心を軽く落とすと、その一瞬後には啓人の目前で腕を振り上げていた。ただ、走って距離を詰めたのだ。十メートルぐらいならば、一瞬で距離を詰めることなど訳なかった。

「遅い」

しかし同じく強化の恩恵を受けている啓人からしてみれば、その程度のことは驚嘆するに値しない。たかが駆け出しと舐めてかかったレビンの一撃を遅いの一言で切って捨て、啓人は半身になる。たったそれだけの動作で上から振り下ろされた拳は空を切り、そしてその隙を見逃す啓人ではなかった。

左足を支軸に、啓人は回し蹴りを放つ。大振りの攻撃をかわされた直後のレビンは、その攻撃をかわすだけの余裕がなかった。鳩尾をめがけた大技の直撃を受け、レビンは数メートル吹っ飛んだ。

「頭に血が上っているからそうなる。落ち着いて、本気で来い」

啓人としても、相手の本気を見なければ意味がないのだ。Bランクということは、冒険者の中でも平均よりは上ということだ。それがこの程度であるわけがないと啓人は信じて疑わなかった。

冒険者としてのランクは格下の啓人が、まるで格上のような言葉をかけてくるのにレビンは齒ぎしりをしたが、その後大きく息を吐いた。腹に残る痛みが、喉元からせりあがってくる咳が、啓人はただの駆け出しではないと認識させたのだ。

啓人がそれでいいというようにそれを見つめる中で、レビンは言葉が唱えた。

「土よ！ 集結せよ！」

二級魔術。二つの言霊を合わせて行使する魔術だ。初級魔術

強化の魔術などの一詠唱の魔術は定められている。燃えろ、と唱えれば火が生まれ、疾走れ、と唱えれば風が起きるように。しかし、それ以外の魔術はそれと異なった。一つ目の言霊で自らの生命を還元する対象を指定し、以降の言霊で動作を指示する。今啓人の目の前で展開しているのが、『土』『集結』の二つの言霊を組み合わせたその結果だった。

レビンの周囲に、魔術によって生み出された大量の土が浮遊し、その土がレビンの四肢に集結し、凝固した。その結果レビンに装着するように生み出されたのは、土の籠手こてと、具足ぐそくだった。籠手の拳の部分には手首に向かうような土の刃が五本の爪のように存在し、具足の踵部分かかとには無数の棘がまるで牙のように存在した。そのフォルムのすべてが、どこか荒々しい獣を連想させた。

「大丈夫だ。流石に刃は厚くして切れないようにしてあるし、棘の先は折つてある。だが……当たるとちつとばかりイテエぞ！」

土の四肢をもつ男が、啓人へと疾駆した。それを見た啓人が吐き出したものはしかし、嘆息だ。Bランクといつても、こんなものか。先ほどよりはマシになったが、未だに遅い。いくら高威力の攻撃を持っているからといって、それが当たらなければ意味がないのだ。

「火よ。防げ」

言霊を、囁いた。火が防いだのはレビンの攻撃ではなく、進撃だ。わざわざ高威力の攻撃を相手にしてやる意味はない。二級魔術でレビンの進路上に火の壁を置いてやるだけでレビンはそのままの速度でこちらに向かつてくることはできなくなる。あとは火の壁をかわして右か左に出てきたところを攻撃してやればいいだけだ。

「土よ！ 防げ！」

「なっ！」

レビンの実力を見くびっていたのか。それとも、啓人に慢心があったのか。啓人の思惑は、火の壁をレビンが土の盾を自らの正面に生みだし突つ切ること破られた。元々が、レビンの籠手と具足を装備するその魔術は攻撃と防御を兼ねるものなのだ。少し防御力を

水増ししてやれば、突っ切ることができないはずもなかった。

生み出した盾は、火の壁を通り抜けた途端にレビンが魔術を解除することで崩れ落ち、盾がなくなり見えたレビンは走りながら既に腕を振り上げていた。ここまで走ってきていることで加速がつき、最初の攻撃よりも二段も三段も速い拳が振り下ろされた。当たる、とレビンが確信した瞬間

「火よ！ 収束せよ！ 爆ぜろ！」

三級魔術。駆け出しの冒険者としてはあり得ないその言霊の数に、レビンは耳を疑った。三級魔術など、レビンでも最近やっとの思いで覚えたものなのだ。

啓人の言霊の通りに火は収束し、啓人の足元で圧縮された。そしてその圧縮が解除された瞬間に 啓人の足元で小規模な爆発が起る。その爆発が予備動作のない移動を可能とし、啓人はレビンの攻撃を回避した。

「……なるほど。どうやら冒険者も捨てたものではないらしい。お前は強い」

さきほどまで危機に瀕していたとは思えない啓人の落ち着きように、レビンは苦笑する。

「それが駆け出しのセリフかって話だよ。三級魔術を使えるなんて聞いてねえぞ」

「師匠の腕がよくてな」

淡々と言葉を掛け合いながら、二人は体制を整えた。両者の瞳から、およそ相手への侮りあなごというものは既に見てとることはできない。奇しくも、今この瞬間に二人が考えていることは同様だった。正面

に居るのは、出し惜しみをしていた勝てる相手ではない。ならば

次の一撃を、必殺の一撃と為そうではないか。

謀らずして、二人は同時に土を蹴った。

「凝固せよ！」

レビンは振り上げた右の籠手に言霊を重ねることで三級魔術と為し。右の籠手を構成する土は更に凝固し、重量を増した。その籠手は、もはや岩といっても過言ではない。

「火よ！ 纏え！」

啓人は全身に火を纏い、近接戦闘に備えた。自らの生命力を用いているからか、自らの魔術が自分に悪影響を及ぼすことはない。

それを訝しみながらも、レビンは拳を振りおろした。レビンが背中で虫が蠢くような悪寒を覚えたのはその時だ。啓人は纏った炎の中心で棒立ちするだけで、攻撃に対してなんらアクションを起こさない。いや、それどころか口元には笑みが浮かんでいる！

脳の全てが警鐘を鳴らしているが、既に振りおろされた拳は止めることができない。レビンは危機感の中、啓人の口が動くのがやけにゆっくりと目に焼きついた。

「爆ぜろ」

二級魔術を三級魔術に上げる、三つ目の言霊。それはレビンが行ったことと同じであった。どうして気付くことができなかったのか。さきほどとは格の違う大規模な爆発により、闘技場は白に満ちていった。

咄嗟のことで目を閉じた観客が目を開けた時に見たのは、悠然として佇む啓人とそれに跪くように膝をつくレビン、それと二人を中

心に広がる炎だった。

次の瞬間、闘技場は一人の勇姿をたたえる喝采に包まれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1722v/>

---

異世界の悪魔

2011年10月30日23時02分発行